



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | <紹介> 川崎剛志著 『修験の縁起の研究—正統な起源と歴史の創出と受容—』                                       |
| Author(s)    | 柴田, 悠帆  |
| Citation     | 語文. 2022, 118, p. 74  |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/95237">https://doi.org/10.18910/95237</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

川崎剛志著

『修験の縁起の研究―正統な起源と歴史の創出と受容―』

柴田悠帆

本書における縁起とは、日常生活が営まれる平地にない特別な力があると信じられた山で修行し、その特別な力を得た人が畏怖とともに平地に迎えられる仕組みが機能するためのものであったとしている。縁起は特別な力の存在とそれを得るための行動が適正であることを保証するために求められ、現れ、伝えられた。

本書では、平安後期から鎌倉後期にかけて次々と現れた、霊山の起源と歴史を示す縁起のいくつかが限定された時空を超えて受容され、修験の正統性を支える典拠として機能した一連の事象を説明するという目的を示している。本書の各論の構成は次の通りである。

序章

第一章 院生期における大和国の霊山興隆と縁起

第二章 『箕面寺縁起』―真言密教の血脈への加筆―

第三章 『大峯縁起』―奉納された縁起―

第四章 『金剛山縁起』―仏典に載る霊山―

第五章 熊野御幸再興と笹窟冬籠りの詠歌

第六章 修験の歴史の創出

終章

序章では、先述の目的を示した上で、寺社縁起、修験道、役行者についての私見が記されており、その見かたに沿って論が展開される。第一章では、興福寺による大和国の領国化の対象が霊山とその信仰を支える組織におよび、在地の組織の反発の中で平安後期以降に霊山由来の験力を含む事業が展開されたことについて論じられている。第二章や第三章ではそれぞれ『箕面寺縁起』と『大峯縁起』について取り上げ、平安後期に修験や縁起が日本仏教と深い関わりを持っていったことについて論じている。第四章では、それぞれ、『金剛山縁起』の示した金剛山の起源と歴史が認められ、同縁起を包摂して日本の歴史が記述される例などを示した。第五章では、後嵯峨院政下での詠歌から熊野御幸が主要な国家事業の一つとして認められていたことを述べる。第六章では、修験の創出について、天台宗寺門派の智証大師の熊野参詣や「当麻寺流記」の観点から論じている。終章では、平安後期から鎌倉後期にかけて霊山の縁起が現れ受容される中で、固有の時空の認識だけでなく、三国伝来の日本仏教史そのものが更新される事態が起こっていたことを示している。

日本仏教と修験の縁起の連関を深く突き詰めた本書は、修験やその縁起だけでなく、日本仏教やその歴史の研究のより一層の発展に貢献するものとなる。

(和泉書院、二〇二一年二月、二一九頁、六、〇〇〇円＋税)

(しばた・ゆうほ 本学大学院博士前期課程修了生)